

大田垣蓮月の和歌について

—— 悲哀を乗り越えて ——

山 本 廣 子

はじめに

大田垣蓮月（寛政三・一七九一年一月八日生—明治八・一八七五年二月一〇日没 俗名誠・のぶ）は、手ひねりの楽焼に自詠の和歌を釘彫りした「蓮月焼」や独特の書風の短冊が愛好された。幕末の歌人としても生存中から名声を博し、歌集『蓮月・式部二女和歌集』・『海人のかる藻』（注一）が出版され、類題和歌集にもその歌が掲載された。しかし、これまで「蓮月焼」や書風に対する高い評価は一貫して変わらないが、和歌に対する評価は、称賛と誹謗とに分かれている。本研究ではその研究史や歌風の特徴、生涯を

踏まえ、蓮月が最晩年まで詠み続けた和歌について考察する。

一、研究史における評価の変遷

現在判明している蓮月の歌は、重複歌を除くとおよそ九三〇数首となる。蓮月自身は、周囲の声望をよそに、自詠の歌に対して慎ましく、謙虚で、歌集が出版されるについても極めて消極的であった。『海人のかる藻』の序歌、

あはれともたれかはみらんもしほ草

かきおくあまのこだになければ

によつても、皮肉ともとれる詠みぶりで、出版を素直に喜んではない。

蓮月は亡くなる前年、富岡鉄斎（注二）宛に書き残した自筆の履歴（注三）に、えりたる歌もたゞすきにてよみ、人の口まねにてかたことのみ、と書いているが、生涯歌を作り、研鑽していた。

蓮月の死後、明治ないし大正期は、雑誌や新聞等に與謝野鉄幹等の歌人をはじめ、様々な人が蓮月の人となりや歌の紹介記事を執筆している。いずれも叙景歌を高く評価している。この間の代表的なものは、大正一二年に佐佐木信綱の「優美繊細」（『近世和歌史』（注四））との評で、その後の近世和歌研究史における出発点となっている。

昭和期に入ると、二年に村上素道が初めての本格的な研究書である『蓮月尼全集』（注五）を刊行し、その和歌篇跋に与謝野晶子が「清らかに優しく、世の匠氣と俗臭とに染む所なかりき」との評を寄せ、更に、福井久蔵、能勢朝次らの

「濁や曇のない純真な心持がにじみ出た」、「一つましやかな歌風の中に、極めてやさしい情感を盛り込んだ」（『近世和歌史』）との評が続く。その後も、水町京子「生活を知るよすがとなる作」（『大田垣蓮月集評釈』）、新田寛「その生活が背景となつてゐる自然詠には澄んで深みのある」（『近世名歌三千首新釈』）、黒岩一郎「風雅な情緒が漂つてくる不思議さがある」（『近代の歌人』）等と評し、それぞれが評価する歌の評釈をしている。平成に入つての論評はわずかだが、その中の大田垣義夫は「文化に対する畏敬の念、仏教的ヒューマニズム、宗教を超えた人間愛がある」（『歌に見る大田垣蓮月の人間観』）とする。

それら、実景や感慨を率直に言葉にした写実的な歌には高い評価が一貫して変わらない。それに対して、評価が分かれるものは次の二種の歌群である。

その一つの批判の先鋒は、昭和四年に「堂上

歌人の流れを汲んだ旧派の歌風」と評したアラ
ラギ派の斎藤茂吉（注六）である。ことに次の
歌

はなのころたびにありて

やどかさぬ人のつらさを情にて

おぼろ月よの花の下ふし

を、「この歌を私は感心しない。ただかういふ、
尤もらしい、人心の機微をあらはしたものだ
どと思はせるような歌が、当時有名になつた
といふことは、当時の歌壇乃至一般の鑑賞者の
気が分かるのであつて、当時の歌壇風潮を知
る一つの目安となる」と酷評する。

翌五年相馬御風も茂吉の評に続けて、「遺憾
ながらわたしはそこに其人の持つて生まれた才
気のあまりに多く煩ひしている事実を否定し得
ないのである。」と記し、「やどかさぬ」の歌
については「実感味の乏しい」「頗る気が利
いてゐるやうであるが、而もわざとらしさが目

立つ。」（注七）と酷評する。

茂吉や御風に続く批判的な見解もこの歌を中
心に、古風な題詠に束縛され、歌語、縁語、掛
詞等を多用した技巧的なものであるという指
摘、ないしは古今集的な調べに拘つた桂園調に
埋没している、平淡味が過ぎたりする、等水町
や黒岩らも非難する。

批判の第二点は、晶子が「興に触れて遺し給
へる詞藻」（注八）と評価している点について、
御風が「機知が先にたつてゐる」「文字の遊戲」、
「薄っぺらな軽い歌ばかり」と酷評している。

ところが、井上通泰が「俳諧歌めきたるも少
からず」とし、「これらは石川雅望などの狂歌
といくらばかりもたがはず」（注九）と評する。
さらに、杉本秀太郎も「軽みを帯びた、俳諧歌
という種類に加えてもいいようなものがある」と
する。また「やどかさぬ」の歌について「石
門心学の道歌を作るような心組で歌つたもの」

としている。それに対して、丸谷才一から藤原親盛の「やどかさぬ人のつらさぞ忘れぬる月すむのべに旅ねせし夜は」の歌を指摘され、杉本もこの歌が本歌か、とし、日常の言葉の中に長らく流通していた型ことばを上句に据えたところに親盛の才覚があり、また蓮月の気転があったとし、仄かに道家めいているところにおもしろさを認めておきたい（注一〇）、と再度評価している。

蓮月の歌け、様々な対象と内容、詠いぶりであることがその特徴の一つである。また、「やどかさぬ」のようにもじった歌などは、評者が何に主眼を置いて歌風を捉えるかで評価が異なる。

次に、蓮月の特徴的な歌風である評価の一貫している写実的な歌と評価の分かれる俳諧的な歌について考察する。

二、写実的な歌について

蓮月は自らの心のままに身の回りの自然と日常生活を詠う。その写実的な歌は、「歌よみに与ふる書」を発表し、写生と万葉主義を掲げ近代短歌革新運動の先駆者となった正岡子規、自然や生活を直視して詠うことを大切にした茂吉の歌と比較対照して考察する。

子規の死の前年の作に「瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゞみの上にとゞかざりけり」という歌があり、寝たきりの病床で観ることを通して藤の花の姿態様相をあまりなく描写している。一方、蓮月の写生のみに徹した歌や実景と心情を詠みこんだ歌と対比したらどうか。

としを経しくりやの棚にくろめるは

煤になれたる仏なりけり

はたごやのすのこのはしにゐる猫の

せのかざりこそ日はのこりけれ

山里は松の声のみ聞きなれて

風吹かぬ日はさびしかりけり

うらがるる浅茅の末にひろばかり

日かげ残りてふる時雨かな

うづみ火に寒さわすれて寝たる夜は

すみれつむ野ぞ夢に見えける

心を奔放に遊ばせる蓮月の歌からは、時の移ろいとともに変わる微妙な光や色や風、時雨の冷たさなどが伝わってくる。これらは把握のきめ細かさ、感受性の豊かさ、表現力の的確さによるものといえる。

茂吉がみずからの身体の衰えを自覚したときに詠んだ歌「いつのまにおとろへをりしわが歯にて漬けたる茄子をながくかりて嘔む」と蓮月の次の歌とを比較した場合はどうか。

いくつねて春ぞと待しおよびより

身のかがまれるとしのくれ哉

老てやむまぐらのしたのきりぎりす

おなじ寢覚にきく人もなし

蓮月は哀歎をそのままに詠い、飾らない。「写

生」を説いた子規や茂吉以前に、すでに蓮月も対象を透徹した眼差しで写生し、また心にわきあがった思いを平明な言葉で綴っている。これらは題詠の束縛から離れ、桂園調の情趣や感傷の域を超えた個性的な歌である。

三、俳諧的な歌について

蓮月の飘逸、洒脱な俳諧的な歌は、素直に自己の感懷を言葉にしているだけで、それが結果的に俳諧的な味わいを生んでいるといえる。井上が狂歌といくらも違わないと評したが、むしろ、芭蕉の俳諧の世界に連なる「かるみ」の世界に遊んでいるに過ぎない。

近世には自由で享樂的な現実世界を取り込んだ俗の文学世界が大きく展開するが、和歌の世界でも川柳や狂歌が一つの独立したジャンルとして生まれる。その一方で、滑稽を意味する「俳諧」も貞門俳諧、談林俳諧を経て芭蕉の蕉風俳

諧に至る。この俳風は「さび」「しをり」「ほそみ」などの閑寂、高雅な句から「かるみ」の句へと移り、「初時雨猿も小養をほしげなり」(元禄二年・猿養)、「むめがかにのつと日の出る山路かな」(元禄七年・炭俵)等の句が歌いだされる。

この「かるみ」に繋がっていく世界が蓮月晩年の歌の世界にも漂っている。蓮月が私淑していた小沢蘆庵の六帖詠草にある「あなさびしたぬつづみうて琴ひかむわれことひかばたぬ鼓うて」の歌は、壁の破れ間から庭に這い出てきた狸に共に琴や鼓を奏でようと呼びかけている。この蘆庵の世界も蓮月の俳諧的な「かるみ」の世界に繋がる俳諧的な歌といえる。

かくれ家に春つげがてら鶯の

そらごとすなり人もこなくに

梅だにに一夜ふしみのうつりがを

少女さびすと人なとがめそ

夜は更ぬかへさはとほしよしやこの

鬼のすみかにやどやからまし

うぐいすの都にいでん中やどに

かさばやと思ふ梅咲きにけり

われしらじせこの袂のほころびは

引きけん人ぞぬふべかりける

浮雲のここにかしこにただよふも

消せぬほどのすさびなりけり

ことのはの道のかたるとなりてだに

おちちる露の玉はばや

童心に返って詠い、また、『伊勢物語』の芥川をもじり、鬼の住処に宿を借る。鳥や獣など生きとし生けるものへの愛情を詠う歌も多い。

これらは西行晩年の「戯ぶれ歌」の世界と響き合い、一茶や良寛の句や歌の心情とも共通する。最も苦手で数少ない「恋」を題材にした滑稽な味の歌、更に、屢々転居を繰り返したり、乞食のような身なりを揶揄されても飄々とし、呵々大笑している姿が浮かぶ。

蕉風俳諧が生まれて以後、俳趣味は近世文学

全般に浸透し、それが却って短歌革新後には批判の対象となるか無視された。しかし、ものにとらわれない飄逸で達観した蓮月の世界がその一首一首に詠みこまれている。これらは幕末の文学的風潮というだけでは捉え難く、極めて個性的である。

四、蓮月の生涯

蓮月自筆の履歴に添い、その生涯を三期に分けてふり返る。

(前半生)

蓮月は寛政三年京三本木に生まれる。自筆履歴には、養父母のことから書き出し、自らの出自を記していない。

実父は、黒田光良(注一一)や杉本(注一二)によると、伊賀上野の城代家老職、藤堂新七郎家六代目、良聖(明和四・一七六七年生、寛政十・一七九八年、三十二歳で病没)である。実母は、蓮月の

出生地が明治初期に衰微した遊郭であり(注一三)、当時の風評からも、村上は町芸妓と推測していた。しかし、黒田は「生母は誠の生後僅かにして丹波国亀岡藩某に嫁す」と記し、村上の推測は疑問視されている。更に黒田は「生母亀岡に在る縁故を以て、八、九歳の頃より亀岡城に勤仕し、一七、八歳にして暇を乞い養家に帰る」と記す。

蓮月の幼少期に関しては、鉄斎の描いた蓮月尼肖像の賛に「幼而聡慧善和歌傍及武技」(注一四)とある程度で、詳しい資料はない。村上は、元々聡明な上に、慈しみ育ててくれた養父も和歌の嗜好深い人であつたこと、城勤めの修行で薙刀、鎖鎌、剣術、舞、歌、裁縫など人に教えるに足る芸、七つを習得したこと(注一五)、更に知恩院に程近い袋町に住んでいたこともある上田秋成に国学の添削を受けた(注一六)と記す。

城勤めから帰った蓮月は養父と養子縁組をしていた望古と結婚する。子も授かるが、八年後には離縁し、望古はその半年後に病没している。近年、望古の歌文稿が発見されたことから（注一七）、村上の描く夫像や離縁事情とは異なり、家庭的には養父、夫、共々歌を詠み、学問を論ずる間柄であつた可能性が高い。鉄幹は『源氏物語』『枕草子』を若き日によく読んでいた」という父禮庵の言を紹介（注一八、伝記篇題辭）し、その兄和田大圓は、蓮月から常に大学、論語、梵網經などの復習、はた教授をして貰ふ（同、消息編序文）と記す。

望古と離婚した四年後に再婚した夫古肥もその四年後に病没し、その後父と共に剃髪。五人とも六人ともいわれる子らも夭折し（大田垣家の過去帳には四人の子の名が記されている。鉄斎は先の賛に続けて有子六人皆夭と記す）、一〇年後の天保三（一八三二）年には養父をも見送る。

つねならぬ世はうきものとみつぐりの
ひとりのこりてものをこそおもへ

前半生はまさに愛着対象を次々と失い、天涯孤独になり、しかもそれまでの安定した知恩院内での生活に自ら別れを告げ、単身岡崎に移つた。自筆履歴にも「なく／＼かぐら岡ざきにうつりぬ」と記す。（蓮月四二歳）（注一九）。

（後半生）

蓮月の後半生はそれまでと一変する。

てすさびのはかなきものもちいで、

うるまのいちにたつぞわびしき

の歌のとおり、自詠の歌を手ひねりの茶碗やきびしよ（急須）などに彫り付けては焼き、それを市などで売つて生業とする自活の生活に転じる。

もともと静謐な生活を好み、訪問客が多くなると屋移りを繰り返す。しかし、もつて生まれ たその旺盛な知識欲と進取の気性に富んだ性分

から、交流は歌友に限らず、学者、僧侶、画家、勤皇の志士等幅広く、書や絵も学んでいた。やがて煎茶の流行もあつて「蓮月焼」が京の土産物として珍重され、求めに応じては焼き、また、短冊にも歌を書いては配り、多忙な日々を送る。後半生には、何気ない日常の暮らしの中での実景や感慨を詠んだ歌が多い。

おりたちて朝菜あらへば加茂川の

きしのやなぎに鶯のなく

ふりくとも春のあめりか閑かにて

世のうるほひにならんとすらむ

夢の世とおもひすてゝもむねに手を

おきてねしよの心ちこそすれ

自活しだした岡崎時代の歌、言葉遊びの中に黒船来航と開港を詠う。幕末の戦乱期になると、命の儚さを知るがゆえに治世を願い、生命が失われることへの深い悲しみといとおしさを詠う。

(最晩年)

七十六歳の慶応二（一八二二）年、蓮月は恐ろしければ逃げいりて、と終の住処となる西賀茂の神光院に移住する。当時は町中から二里離れた竹藪と畑に囲まれた寺院内に作陶用の板の間や土間も設えた草庵が建てられた（注二〇）。

露のみをたゝかりそめにおかんとて

草ひきむすふ山の下かけ

神光院では、住職の和田月心（号呉山）、智満親子の他、新たな交流も生まれ、精力的に歌を詠んでは作陶し、また絵筆もとり、数多くの自画賛や合作を残している。

あけたてば埴もてすさびくれゆけば

ほとけをろかみおもふことなし

墨染の袖にも梅のかをりきて

心げさうのすすむよはかな

しぬもよししなぬもよろし又一つ

どうでもよしの春はきにけり

最晩年には、心静かに悟りの境地に至り、無

常菩提の心情を詠うかと思えば、死を受け入れ、待つ心境を俳諧的に詠う。蓮月の心の軌跡が読み取れる。

五、蓮月の和歌の意味と到達点

蓮月のこのような生涯から詠み出された歌の一つには、求めに応じて作る焼物や短冊などの歌がある。また、今一つには歌を詠み出さなければおれない内的な疼きがあつて詠まれた歌がある。いずれも蓮月にとつては重なり合い、欠くことのできない意味を持っていた。蓮月は愛する家族を次々に奪われた運命に立ち向かう対象喪失の過程で出家し、悲嘆の底から立ち上がる昇華の心理機制（注二）としての歌である。即ち、機知を働かす心的作業が必要であり、それが蓮月にとつては歌を詠み、ひたすら埴の土をひねり、それに歌を彫りつけて焼く作業であつた。蓮月は詠うことと作陶を通して悲哀を乗

り越え、それ故に他人に対しても、自分に対しても深い人間性や、大人が子どもに対するような優しさを生み、その結果として、その歌の中に個性的で心を打つ写實的な歌や俳諧的な世界に遊ぶ歌が生まれた。その裏には自己の存在を全うするための悲壮な自己主張が読み取れる。とはいへ、既に辛さをも笑つて済ませることができる飄逸な味わいとともに、生も死も老もありのままに受け止める逞しさや余裕さえも見る事が出来る。

「やどかさぬ」の歌について村上は、蓮月がふと思ひ立ち吉野の花見に赴き、山家に一夜の恵を請うたが許されず、詮方なく花の下に草枕して思うまま花を見た時に詠んだ、との逸事を紹介している（注三）。先の章にこの歌の様々な評価の一端を紹介したが、このもじりを蓮月の生涯と重ね合わせて解釈し、次に私見を述べる。

「やどかさぬ人のつらさ」は「情」にかかる修辭法の序詞である。履歴の挿入歌にある「つねならぬ世はうきものとみつぐりのひとりのこ」る身、「露のみをただかりそめに」置くつらき身のように、まさにこの無常の世に生きるこの身が「情にて」生かされている。その「情」は宗教者である蓮月には仏の慈悲、あるいは看取らねばならなかった愛着対象の御霊であろうか。

そのような「情にて」から「朧月夜の花の下臥」と転じて詠まれた内的世界には、蓮月の俳諧的な「かるみ」の世界に遊ぶ心に辿り着く心の軌跡が見て取れる。春の宵の桜花の美と香に包まれる世界に心を遊ばせている蓮月の姿がそこにある。また、

いちじろく匂へるものを櫻花

くもか雪かとなにまがふべき

の歌は、桜花の美を雲や雪に見立てるのではな

く現実には即して詠むことを蓮月流に示唆しており、蓮月が何ものにも拘らない自由さを獲得していく道程の歌として捉えることが出来る。伝統的な和歌に対する挑戦として、またそれまでの蓮月自身の「旧派」的な歌に対する自戒の歌として読み取ることが出来るからである。

さらに、蓮月の歌は、晩年になるほど宗教性と芸術性が相俟って内的世界が昇華されている歌群がある。

西行の「願わくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月の頃」をもじり

ねがはくは月のかげにて秋しなん

さらばやみにもまよはざらまし

と詠み、最晩年に蓮と月を詠みこんだ

ねがはくはのちの蓮の花のうへに

くもらぬ月をみるよしもがな

と辞世の歌へと転じる。鉄斎に遺骨を包むための白木綿の一反風呂敷に蓮と月の絵を描いても

らってこの歌を添え、

ちりばかり心にかかるくもなし

いつの夕やかぎりなるらん

の歌を経帷子に書き、死出の旅の準備をしていた(注二三)。

また、養父を見送り

たらちねのおやのこひしきあまりには

はかにねをのみなきくらしつゝ

と詠み、その後最晩年まで仏を拝む日々の営みは変わらない中で、

たらちねの親の身おもふ真心の

ふかきふちにもあさりぬるかな

と詠み、僧侶が網で海老を捕まえ、殺生している様を描き添えている(「蛸子和尚自画」八十一才時、注二四)。生も死もありのままに受け入れ、人の世を達観して輕妙洒脱に詠う。

おわりに

近代短歌の夜明け前の時期に、蓮月は歌を詠

み、ひたすら土をひねることで愛する家族との離別の悲哀を乗り越え、その人生を全うした。その歌は、対象を透徹した眼差しで写生し、また心にわきあがった感懷をありのままに平明な言葉で綴られている。それが結果的に独特な味わいを持った写実的な歌や俳諧的な歌となっている。その内の写実性が優っているものは次代の近代短歌革新への第一歩を踏み出している歌風であり、その俳諧性が優っているものは江戸時代の雅俗の文化を体現しつつ、かつそれまでの俳諧歌を集約している歌風である。晶子が先に挙げた跋文の続きに「猶若し大正の世にもいまさば如何になど憾まるる」と記している。しかし、仮に近代短歌が向かった自己の内面への凝視と開放の時代に蓮月が生きたとしても、蓮月は晶子の「みだれ髪」のような本能の開放を目指した自由奔放な詠いぶりはしていないであろう。それが近代短歌革新の目から見れば蓮月

歌風の限界といえは限界であるし、特徴ともいえる。

幕末から明治へと社会が大きく揺らいでいる変動の時期に、宗教と芸術の世界に生き抜いた蓮月の歌は、その写実的な味わいの歌、俳諧的な「かるみ」の世界に遊ぶ歌故にこれからも享受されていくことと思われる。

注

一 (1) 編者不明『蓮月・式部二女和歌集』書林・綿谷三郎兵衛 金屏堂蔵板 明治元年

(2) 近藤芳樹編『海人のかる藻』書林・辻本仁兵衛、明治三年

二 富岡鉄斎 天保七年(一八三六)生く大正十三年(一九二四)没。南画家。国学、儒学、詩文、仏典を修め、維新後、石上神宮、大鳥神社の宮司となる。大和絵から南画に進み、高逸な画風で新生面をひらいた。幼少のころから蓮月が我が子のように可愛がり、十五歳のころより侍童として同居し、鉄斎が蓮月の陶器製造を手助けした。鉄斎が絵を描きだしてからは短冊に蓮月が賛を添えるな

どして鉄斎の生活を支えた。

三 自筆の履歴は富岡家所蔵。写真版は、徳田光圓他著『大田垣蓮月』講談社 昭和五七年発行他に掲載されている。

四 佐佐木信綱『近世和歌史』三二頁 博文館大正二二年一月

五 村上素道著『蓮月尼全集』蓮月尼全集頒布会昭和二年刊。『増補蓮月尼全集』思文閣昭和五十二年刊

六 斎藤茂吉『明治大正短歌史概観』八七頁 昭和四年改造社

七 相馬御風『貞心と千代と蓮月』一四二頁 昭和五年(一九三〇)三月 春秋社

八 前著五、和歌篇 跋
九 井上道泰『南天荘次筆』の歌風評「蓮月尼のあまのかる藻」四〇八頁 昭和十一年 弘文荘

一〇 杉本秀太郎著『大田垣蓮月』小沢書店 昭和五十七年刊 一三一、二五、二三五、六頁

一一 黒田光良著「蓮月尼履歴書」。前著五 下巻伝記篇一五頁に所収。黒田は蓮月から二代目と称することを許され、蓮月焼きを継承した。

一二 前著一〇三一頁以下

一三 村井康彦著「蓮月尼―その生涯と思想」徳田光圓他著『蓮月』講談社 昭和四十六年刊、一五六頁に所収、前著三の後段にも再録

一四 前著五 消息篇口絵に鉄斎の自画讃「蓮月尼肖像」を掲載 下巻二〇頁

一五 前著五 下巻二四頁

一六 前著五 下巻三一頁 秋成は文化六年に没しており、城勤めから帰った蓮月は養父と養子縁組をしていた望古との結婚が待ち受けており、秋成から直接和歌や国学の教えを受けることが出来た期間がどれほどあったかは不明である。

一七 多治比郁夫「蓮月伝の一資料―望古歌文稿をめぐって―」大阪府立図書館紀要第三二号 一頁 平成八年

一八 前著五 伝記篇題辞および消息編序文

一九 蓮月の生い立ちおよび前半生については前著五のほか、主に以下の資料に記載されている。

・成瀬慶子著『大田垣蓮月』

・村井康彦著については前著一三

・土田衛著「蓮月尼消息の新資料」愛媛大学紀要第七卷第一号研究編・昭和三十六年、同大学国文研究第十一号・昭和三十七年。前著五、消息編二『田結莊

家」書簡について』に転載

二〇 徳田光圓著「蓮月尼について」墨美一〇九号所収昭和三十六年七月発行

二一 「対象喪失」、「昇華」の概念はいずれも心理学ないし精神分析の用語である。

二二 前著二 下巻逸事篇一八八頁、西村天因他編『近古歌話』から引用。

二三 前著二 下巻逸事篇二〇七、二〇八頁

二四 『墨』四十四号 二七頁 昭和五八年

(龍谷大学仏教文化研究所客員研究員)